

目一杯の祝福を君に

オミヤマ オクタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもオリ主が崩壊スターレイルの世界に転生したらという話です。
作者はにわかです。

目次

君は遙か遠くに浮かぶ星

1

君は思い眠りにつく

5

君は遥か遠くに浮かぶ星

■
死んだ時の記憶はない。

目が覚めたら僕は白い変な空間にいた。そこにいた神様が言うには俺は転生するらしい。転生する世界は崩壊スターレイル？

らしい。自分はやったことのないゲームだが、友達が異様に進めていたからやってみようとは思っていたんだが…

唯一の心残りには彼女なし童帝で死んだことだ…せめて1回くるいは、彼女が欲しかった。ただこれから受験勉強しなくていいと考えるとまあいいかなって思ってしまった。

さて転生した先は、「存護の町」ペロブルグだこの町は雪が降っているのに凍えるほどでは無い、でも十分に寒いんだけどね。

僕が転生した先の家族は酷かった毎日お母さんとお父さんが喧嘩していて、お母さんからは虐待を受けていた。小さい頃から話せたり大人でも知らないようなことを言っ

ていたから不気味にでも思っていたのだろう。それかただのストレスを発散するための道具だったのか分らないが……。

命の危険を感じ家から逃げてきたのだが、行くあてもなく2日間ほどさまよっていたら倒れてしまつて起きたらベットのの上にいた。周りを見渡すと白髪の可愛い6歳くらいの女の子がいた。女の子は起きた僕に驚いたのか目を見開くと、直ぐにドアを開け別の部屋に言つてしまった。すぐに白髪の女の子が女性を連れてきた。僕は拾つてくれた事を感謝しようとしたのだが、何故か声が出なかつた。

「お母さん、もしかしてお腹がすいているんじゃないかな？」

「そうかもしれないわね、とりあえずご飯にしましょうか。」

「すぐにご飯を持つて来るから待つてね！」

女の子と女性はパタパタと言つてしまった。女の子だけ戻つてきた。手にスープはらしきものを持つている。

「これはねスープだよ！お母さんのスープはとても美味しいんだよ！」

女の子は元気いっぱいにそう言うのと僕の隣に椅子を置いて座つた。

「私が食べさせてあげるね、暑いから、ふーっふーっ、よし！あくん」

「……美味しい」

スープで喉が潤つたおかげか喋ることが出来た。

「！ でしょ！」

「とつても美味しいよありがとう。」

「エヘヘ どういたしまして！」

「ご馳走様。とても美味しかったよありがとう。」

「そういえば名前はなんて言うの？」

「私はクララだよ。あなたは？」

クララに言われて僕は今まで名前と呼ばれたことのないことに気づいた。お母さんからはおまえとしか言われたことしか無かった。名前か……僕は前世の名前から今世の名前はオクタに決めた。

「僕の名前はオクタだよ。よろしくクララ」

「オクタ君よろしくね！」

「お母さん！私、オクタくんと一緒にいたい。良いでしょお母さん？」

「そうは言っても、オクタくん自身が決めたことだからねえ」

あの後僕はいつでも厄介になるのは申し訳ないと思い。クララと、クララのお母

さんに現状と家を出ることを伝えた。しかしクララが一緒に住もうと言ってきたのだ。

「クララ、家は、君のお母さんが住み込みの仕事を用意してくれるんだ。だから僕は大丈夫だよ。」

「…」

「すぐにまた来るからさ」

「クララいつまでもだだを捏ねてるとオクタくんに嫌われちゃうわよ」

「!… わかった。またすぐに来てね。」

「わかった。バイバイクララ」

「うん… バイバイ」

君は思ひ眠りにつく

クララに初めて会った日から一年が経った。今年で僕は、15歳である。クララのお母さんに斡旋してもらった仕事は俗に言う何でも屋だった。そこで、僕は、町中を走り回ったり、料理を作ったり、鉾山に行ったり、流浪者やロボットと戦ったりした。そのおかげか僕の体に筋肉がついた。そこらへんの変な機械や流浪者なんかは僕の敵ではない。しかし最初の方は毎日死にかけてので、寝る時間を削り、知識をつけ、体を鍛えたのだ。

最近の町はなんだか物騒だ流浪者が鉾山から町に来て盗みを働いたり人を殺したりしているようだ。そのため僕の元に仕事がたくさんきて、ここ数ヶ月はクララに会えない状態が続いていた。思わずクララの不貞腐れた姿が思い浮かんでしまい。心が暖かくなる。無理矢理にでも時間を作ってクララに会うことに決めた。

仕事が終わりに帰路についていた。薄暗い路地裏に入ったあと少し先に人がいることに気づいた。嫌な予感がして急いで近寄ってよく見てみると。

クララだった

体中には泥がついていて、綺麗な白髪が汚れている。大きな傷はないようだ。

「クラーラ！クラーラ！大丈夫か!？」

「すぐ病院に連れて行くから頑張ってくれ！」

急いで医者のもとにクラーラを連れて行った。

「クラーラは大丈夫なんですか!？」

「落ち着いてください、低体温症とストレス、疲労からか気絶していますがまだ命には別状はありません」

安心したのか、頭が冷静になってきた。それにしてもどうしてクラーラはあんなところにいたのか疑問が出てきた。

—————

私の幸せが壊れるのは一瞬だった。

「クラーラこれ運んでくれない？」

「いいよお母さん！」

「他には何か手伝うことはないかな？」

「ありがとうクラーラ。席についててまっててちょうだい。」

「うん！」

「それにしても最近オクタクくんこないなあ」

最近オクタク君は全然こない私のことなんか忘れちゃったのか不安になってしまう。

「クララは本当にオクタク君が好きなのね。」

「違うよっ！ オクタク君は私の友達なの！」

「あら、ごめんなさいね」

お母さんはいじわるだ、確かにオクタク君は私の大事な友達なんだ。好きとは違うはず？

少し考えてるとお母さんがご飯を運んできた。

「クララ考えているあなたも可愛いけどとりあえずご飯を食べましょう」

「うん！」

「いただきます。」

私はスプーンでスープを口に運ぼうとしたら

ドンドン

「？」

家のドアを強く鳴らす音が聞こえる。

「クララちよつとまって」「ドン」

ドアが開きそこには男の人が来た。右手には銀色に輝くナイフを持って。男の人は

直ぐに私たちのところにやってきた。

お母さんは私を、守るように立った。

「クラーラー！逃げて！」

お母さんが私に逃げてと言っているけど足が動かない。

「そんなに騒ぐな、親子共々すぐに、殺してやるよ。」

「クラーラー！」

「！」

足が動くようになって、玄関に続くドアを開けて部屋を出ようとした瞬間、後ろをみた。お母さんのお腹から血がたくさん出ていた。

お母さんは私の顔を見て、微笑んで、口を開く

「あなたにこの先目一杯の祝福を。さようなら」

そして気づいたら外にいた。

「うっ……うっ……ごめんさい、おかつ…… あっ……さん。」

涙がポロポロと出てきてが止まらない。鼻をすすつても悲しい気持ちはなくならない。大好きなお母さんはもういない。もう自分の居場所はない。私の帰る場所はない。

最近家に来ない男の子が頭に浮かんだ。
「オクタ……くん」

意識はそこでなくなつた。